徳島新聞　平成２７年２月２０日（金）

うつ病 血液で診断

徳大グループ発見

問診に加え精度向上

実用化へ実験規模拡大

血液を使ってうつ病かどうかを客観的に診断できる方法が、徳島大医学部の大森哲郎教授（精神医学）の研究グループによって発見された。従来の問診に加えることで診断の精度が向上し、将来はうつ病の血液診断の実用化につながる成果という。

うつ病はストレスなどさまざまな環境要因で発症するとされる。研究グループは、メチル基と呼ばれる分子が遺伝子に結合する化学反応「DNAメチル化」が、ストレスなどによって変化を来すとする先行研究に着目し、簡単な採血で血液中の遺伝子のメチル化レベルが測定できないかと考えた。

研究を主導した沼田周助講師（精神医学）によると、研究グループは、うつ病患者20人とうつ病でない19人の2グループから血液を採取し、多くの遺伝子のメチル化レベルを測定した。

その結果、1種類の遺伝子の比較ではメチル化レベルの値に大きな差はみられなかったものの、18種類の遺伝子の値を組み合わせると、2グループの差が生じ、うつ病が判別できることが分かった。別の二つのグループ（患者・健常者12人ずつ）で同じ実験を行った場合も有効だった。

これまでのうつ病の診断方法は、医師の問診が主で、対象者が質問に答えることができなかったり、症状が変化したりして判別が難しいとされてきた。

沼田講師は「実験の規模を拡大し、精度の高い診断方法として確立したい。将来は専門の精神科以外でも利用できる診断キットの開発につなげたい」と話している。

研究論文は英科学誌エビジェネティクス電子版に掲載された。

（矢田諭史）

客観的な指標に

国立精神・神経医療研究センターの樋口輝彦理事長の話　客観的な指標があることで、うつ病の早期発見、早期治療につながる。また「何が要因でうつ病と判断したのか」という患者や家族の疑問にも答えることができるだろう。研究を進めて、臨床現場で活用されることに期待したい。